

霞会館記念学習院ミュージアム ミュージアム・レター

KASUMI KAIKAN MEMORIAL
GAKUSHUIN MUSEUM
霞会館記念 学習院ミュージアム

Museum Letter No.56

発行日 ● 令和7年(2025)6月20日

もくじ

ごあいさつ	1
写真 皇太子裕仁親王／御好裂	2
唐三彩と俑／古代土器複製標本	3
李王家紋のボンボニエール／ 展覧会「華族文化 美の玉手箱」報告	4



リニューアルオープン記念展Ⅱ フライヤー

ごあいさつ

学習院大学の皆さん、本年3月より、我が目白キャンパスに待望の霞会館記念学習院ミュージアムがオープンいたしました。場所はキャンパス内の東側、メタセコイヤや欅の大木が並ぶ森のなかに、新たなミュージアムが佇んでいます。この建物はコンクリート打ちっ放しの歴史的建造物です。設計者はかの前川國男(1905-86)。彼はル・コルビュジエ、アントニン・レーモンドのもとで学び、モダニズム建築の旗手として、第二次世界大戦後の日本建築界をリードした人物です。つまりこの建物は学習院の「宝」でもあるのです。館内は落ち着いたシックな雰囲気でリニューアルされました。授業の合間などに、ふらりと気軽にこのミュージアムに訪れてください。ステキな美術作品との出会いがあるかも。

ところで、ご挨拶が遅くなりました。私は館長の荒川と申します。学習院大学の教員になる前は、長く美術館の学芸員をしてきました。これから皆さんに喜んでもらえるような展覧会をどんどん企画していきたいと思います。これまで学内には文学部研究棟の1階に昭和50年(1975)に開館した大学史料館が存在し、旧大名や旧公家などの文化史研究が地道に続けられてきました。しかし、旧展示室ではあまりに展示スペースや収蔵庫が狭く、展覧会活動には制限がありました。そこでこの度の新ミュージアムが建設されたのです。学生の皆さんもこの展覧会企画に参加していただくプランもあります。皆さん、霞会館記念学習院ミュージアムでお待ちしています。

館長 荒川正明

芸術と伝統文化のパトロネージュⅡ まだまだ開く玉手箱展

令和7年(2025)3月14日に学習院大学史料館は霞会館記念学習院ミュージアムとしてリニューアルオープンいたしました。開館記念展「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱 芸術と伝統文化のパトロネージュ」は15,000人を超える多くの方々にご観覧いただきました。今展はパートⅡとして、引き続き当館の25万点に及ぶ収蔵品からパトロネージュにまつわる作品をご紹介します展覧会です。

学習院の教育理念は今も昔も「豊かな人間性」を育むことにあります。そのため教育教材にも一流の史料・作品が用いられてきました。このたびの展覧会では、教育教材に使用されていた、そして現在も使用されている、標本類をはじめとする史料・作品の中から「こんなものも教材?」と思わず唸る逸品などもご紹介し、それにまつわるパトロネージュの物語をひもときます。まだまだ開く学習院コレクションの玉手箱をお楽しみください。

学芸員 長佐古美奈子

写真 皇太子裕仁親王



Henri Manuel (仏国)撮影 ゼラチンシルバープリント
大正10年(1921) 5～7月

大正10年(1921)3月から9月の半年間、日本の皇太子が初めてイギリス、フランス、ベルギー等の欧州各国を外遊した。この外遊は、皇太子が海外の実情を見聞し、海外の君主・元首・要人と接する実地体験の場であり、外遊中の動静は各種メディアを通じて報じられ、日本国内に皇太子人気を引き起こした。

この写真は、フランス滞在中(5月から7月)に撮影された20歳の裕仁親王(1901-89)である。窓から差す柔らかな外光に包まれた背広姿(平服)で、自然な表情やポーズの効果もあり、画面全体がくつろいだ雰囲気溢れ、知的で凛々しい近代的な青年としての皇太子像が表現されている。

撮影者Henri Manuel(1874-1947)は、20世紀初頭のフランス政府の公式写真を担い、多くの政府要人や国賓、著名人を撮影した肖像写真家である。外遊に供奉した宮内書記官二荒芳徳著『皇太子殿下御外遊記』(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、大正13年)には、同時に撮影された別カットの写真が口絵にカラー掲載されていることから、Manuelの写真が外遊の成功を象徴する存在であったことがわかる。

この肖像写真は、天皇家を示す十六葉八重表菊紋の額に納められ、皇太子より外遊に供奉した東宮武官及川古志郎に贈られた。外遊を供にした供奉員に対する記念とねぎらいの意味を込めて帰国後に下賜されたとみられる。

(学芸員 白政晶子)

御好裂

御好裂は、天皇や皇后のお好みの意匠を織り出したことからこの名称で呼ばれてきた絹織物である。近代日本における絹織物技術の維持と向上を奨励するため、近代の皇室においては、俵屋喜多川家など西陣の名門の織屋に多様な意匠の錦を織らせてきた。御好裂は、新年の御歌会始のお題や干支、季節を表す動植物や器物、吉祥文様、留守絵などが段替わりで織り出された錦で、お年玉のほか、折に触れて天皇皇后から皇族はじめ関係者に下賜されてきた。宮中においても卓被などに用いられたほか、余り裂で紙入れなどの小物を作り下賜することもあった。生地でも賜った宮家などでは、アルバムの表紙などとしても用いられている。

この二種の御好裂は、北白川宮家に伝えられた。一つ目の錦は、萌黄の地に葦の合間を流れゆく観世水を思わせる流水を表し、その水辺には花を咲かせた瀟洒なつつじの株を配する意匠から、季節からみて流れに遊ぶ魚は鮎であろうか。さわやかな初夏を彷彿とさせるデザインである。もう一つの錦は、有職故実の世界でも散見される紫綵とよばれる紫と白の段替りを斜めに配した地に、舞い降りる丹頂鶴。そして春を寿ぐがごとく咲き誇る可憐な紅梅の折枝を織り出している。

両者とも宮中から下賜された時期及び拝受した人物を明らかにする資料に恵まれないが、御好裂がお年玉として宮中から下賜されてきた歴史とともに、北白川宮永久王妃祥子のお印が紅梅であったことを踏まえると、同妃の時代に下賜された可能性を考えることもできよう。

(EF共同研究員 田中 潤)



明治～昭和時代

唐三彩と俑

霞会館記念学習院ミュージアムには、中国古代の明器(墓の副葬品)や俑、唐三彩など貴重な資料が収蔵されている。これは、19世紀末にスイスの教育者、ベスタロッツの提唱した直観(実物)教授法が、学習院にも取り入れられていたことを証明するものであろう。

これら中国古代の遺物は、記録によると大正時代前期を中心に、主に中国大陸で活動していたと思われる古美術商・江藤涛雄から購入されたものである。

「唐三彩馬」【図1】:高さ32.8cmとやや小ぶりの馬であるが、足や胸、お尻の筋肉が隆々としており、唐時代でも初期の頃の作と判断される。馬の彩色は緑色、褐色、白色の三色で彩られる。

「唐三彩鎮墓獸」【図2】:高さ29.2cmとやや小ぶりの鎮墓獸(墓を守り悪霊を祓う役目を有する)で、肩に羽が付く。腹の部分は緑色、褐色、白色の斑で彩られている。角の部分は後補であろうか。

「唐武人俑」二体【図3】:二体とも同じ墓から出土した可能性が高い。大きな武人俑は將軍、小さな方は兵士であろうか。白い胎土に黄釉を施し、その上に顔料を塗り、甲冑や衣装等の細かな部分を表現している。この二体とも唐代に流行した「明光鎧」を着用している。おそらく唐時代初期の作と判断される。

「唐女性俑」【図4】:この女性が羽織った緑色の美しいシヨールが印象的である。おそらく唐時代前期の作か。

(館長 荒川正明)



図1 唐三彩馬



図2 唐三彩鎮墓獸



図3 唐武人俑



図4 唐女性俑

古代土器複製標本



原型制作:濱田庄司
型抜き・複製制作:島岡達三
昭和24-25年(1949-50)頃



学校教育用教材として制作された、縄文・弥生土器の複製標本である。終戦後の新たな学校教育では、資料や模型を用いた授業が推進され、考古用教材の一つとして作られたのがこれらの土器で、「ドルメン教材研究所」により販売された。学習院中等科が購入し授業などで用いたという。

ドルメン教材研究所には戦前から民藝運動に携わっていた村岡景夫が関係しており、土器の制作は村岡の紹介で濱田庄司が担うこととなった。濱田は考古学者らから制作手法などの教示を得て、益子に土器用の窯を新たに築いて制作に挑んだ。益子産の土で濱田が原型を作り、弟子の島岡達三が石膏で型取りし量産体制を整え、組紐職人だった島岡の父が縄文土器の縄目模様を施すための細工棒を特製している。土器の底裏には芹澤銈介デザインの「D」マークを押印して、複製品だということを示し、販売時には明治大学考古学研究室に在籍した芹澤の息子・長介による説明書が添えられた。まさに民藝関係者らの尽力で完成したといえるだろう。

ドルメンでは、各時代の土器などを8回に分けて販売する予定だったが、価格が余りにも高額で、これらの標本のみならず2回で制作は終了してしまっ。学校教育への情熱を物語るこれらの土器標本は、現存数も少なく貴重な品々である。

(EF共同研究員 森谷美保)

李王家紋のボンボニエール

西洋由来のボンボニエール、日本では明治22年(1889)の大日本帝国憲法発布式から皇室御慶事の引出物として登場し、日本皇室独自の工芸品として発展してきた。同時期朝鮮半島でも李王家の工芸品としてボンボニエールが出現した。李王家紋付のボンボニエールには、「漢美」「美」の刻印を有するものが多く見られる。「漢美」【図2】とは漢城美術品製作所、「美」【図4】は李王家美術館製作所のことである。

ソウルの旧名である「漢城」を冠した「漢城美術品製作所」は、1909年大韓帝国時代に設立された王室御用の美術品製作所である。日本が併合した後の1911年からは李王職の直営となり「李王職美術品製作所」と名を改めた。製作所の作品は「朝鮮固有の美術工芸品を復活し、いわゆる純朝鮮趣味の発揮と其改良発達を図らんとする」(山口豊正『朝鮮の研究』)ものであり、「鑄物、打物等の金属製類も総て周、漢を模して」(『京城繁昌記』)いた。ボンボニエールも李王家が代々儀式の際に使用してきた器物を象っている。

そこには日本の関与があったにせよ、伝統工芸を後世へ伝えようとする李王家のパトロネージュを見ることが出来るのである。

(学芸員 長佐古美奈子)



図1 鏝斗形ボンボニエール
李王家紋 銀製 高4.0



図2 (刻印)「漢美」



図3 注口付扁壺形ボンボニエール
李王家紋 銀製 高5.0



図4 (刻印)「美」

リニューアルオープン記念展覧会

「学習院コレクション 華族文化 美の玉手箱 —芸術と伝統文化のパトロネージュ」 (3月14日～5月17日) 開催報告

霞会館記念学習院ミュージアムのリニューアルオープン記念展開幕に際し、3月13日に開館セレモニーが催され、彬子女王殿下、霞会館理事長鷹司尚武氏、耀英一学習院長、遠藤久夫学習院大学学長によりテープカットが行われました。内覧会にはプレスを含め約600人が来館、翌初日には開場を待つ人々の姿も見えての好発進となりました。その後も連日多くの方々が入館し、卒業式と入学式には学生と保護者の皆様に、また「オール学習院の集い」の日には在校生・卒業生をはじめ数多くの方々、新しい館の姿をお披露目することができました。

「学習院ミュージアム講座」と名を変えた講座は記念すべき第100回を数え、今上陛下ご来臨のもと、シンポジウム「学習院コレクションとパトロネージュ」を開催。基調講演には彬子女王殿下をお迎えし、本学文学部哲学科教授らにより熱心な議論が交わされました。ギャラリートークは当館学芸員・研究員だけでなく本学教授も担当して全4回開催し、好評を博しました。

展示資料約120点は前後期で大幅に展示替えをし、ドレスや装束は四期に分けて陳列しました。再訪する方も多く、来場者数は過去最高の15,719人を数えました。

(EF共同研究員 戸矢浩子)



テープカットの様子

【リニューアルオープン記念展Ⅱ】

「学習院コレクション 芸術と伝統文化のパトロネージュⅡ —まだまだ開く玉手箱」

【主催】霞会館記念学習院ミュージアム

【協賛】一般社団法人 霞会館

【会期】令和7年6月23日(月)～8月2日(土)

【休館日】土曜・日曜・祝日・7/14(月)(ただし8/2(土)は開館)

【開館時間】10:00～17:00(入館は16:30まで)

【入館料】無料

【関連イベント】当館館長・学芸員によるギャラリートーク

日時: 6月26日(木)、7月11日(金)、8月2日(土) 各日14:00～

会場: 霞会館記念学習院ミュージアム特別展示室

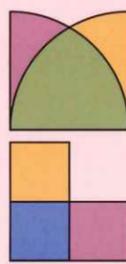
*事前申込不要

◎最新情報は右の二次元コードより当館の公式X(旧Twitter)をご覧ください。



ミュージアム・レター第56号

令和7年(2025)6月20日発行
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
電話 03(5992)1173
FAX 03(5992)9219



KASUMI KAIKAN MEMORIAL
GAKUSHUIN MUSEUM
霞会館記念学習院ミュージアム

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>